

詩編 22 : 2~32

ルカによる福音書 23 : 32~38

「十字架につけられたメシア」

【前奏】

【招詞】 申命記 6 : 4~5

【祈祷】

【聖書】 詩編 22 : 2~32、ルカによる福音書 23 : 32~38

【説教】 「十字架につけられたメシア」

<預言の成就>

イエスさまが、いよいよ十字架につけられる場面です。十字架につけられる場所の名前は「されこうべ」。他の福音書では、その「されこうべ」を意味する言葉で、「ゴルゴタ」と記されています。

32 節には、二人の犯罪人が一緒に死刑にされるために引かれて行った、とありました。

これは、ルカによる福音書 22 : 37 でイエスさまが語っておられた御言葉、これは旧約聖書イザヤ書 53 : 12 からの引用でもあります。それが実現したことを表しています。イエスさまは、こう言っておられました。「言うておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する」。

そして、ローマの総督ピラトの下で十字架刑を執行するローマ兵は、イエスさまの十字架を真ん中にして、左右に犯罪人の十字架を立てました。

イエスさまの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書かれた札が掲げられていた、とあります。この札は、罪状書きです。イエスさまの死刑の罪状は、「ユダヤ人の王」。

ですから、この十字架の配置は、まるでイエスさまと二人の犯罪者を、王とその側近のように見立てて、からかっているかのようです。イエスさまは、まるで犯罪者の王、犯罪者の中の犯罪者であるかのようによ扱われたのです。

この、「これはユダヤ人の王」という罪状書きを書かせたのは、ローマのユダヤ総督ピラトでした。死刑を決定する立場にあったピラトは、ユダヤ人たちがイエスさまに死刑を求めその訴えを聞いてきましたが、どうしてもイエスさまに、死刑を科すほどの罪があるとは思えませんでした。裁判の場面では、ピラトは三回も「この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからない」と人々に告げたのです。

ピラトは、ユダヤ人たちがイエスさまを訴えているのは、彼らの間の宗教的な事柄であり、またユダヤ人指導者たちの妬みや、怒りや、敵意のためであり、ローマ帝国が介入して死刑にするような問題ではない、と考えていたはずでした。

しかし、ユダヤ人の指導者たち、また民衆たちは、一緒になってイエスさまを「十字架につけろ、十字架につけろ」と大声で叫び続けました。それでどうとう、ピラトは彼らの訴えに従って、イエスさまを十字架につけるように決定せざるを得なくなったのです。

そのピラトが、「これはユダヤ人の王」という罪状書きを書かせたのは、イエスさまに対するよりむしろ、イエスさまを殺したがっていたユダヤ人たちへの皮肉、腹いせだったのかも知れません。ヨハネ福音書の同じ場面では、この罪状書きを見て、ユダヤ人の祭司长が「この男は『ユダヤ人の王』と自称した」と書き直して欲しいと訴えました。でも、ピラトはそれを許さなかった、とあるのです。

ピラトは、このユダヤ人の王は、ユダヤ人たちの手によって十字架につけられたのだと、皮肉をもって示したかったのかも知れません。

そして、34 節後半には、「人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った」とあります。ローマ兵たちが死刑囚の服を分けるのは、当時の習慣だったようです。

しかし、これらのことを通して、今日の旧約聖書の詩編 22：17～19 で語られていた御言葉が、イエスさまにおいてここでも実現しました。詩編にはこう書かれていました。「犬どもがわたしを取り囲み／さいなむ者が群がってわたしを囲み／獅子のようにわたしの手足を砕く。骨が数えられる程になったわたしのからだを／彼らはさらしものにして眺め、わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く」。

また、36 節にあった、「兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突き付け」たという出来事も、詩編 69：22 にある、「人はわたしに苦いものを食べさせようとし／渴くわたしに酔を飲ませようとしませす。」という御言葉の成就です。

イエスさまにおいて、確かに旧約聖書の預言の御言葉が成就しているということを、ルカは一つ一つ示しているのです。

<自分を救え>

さて、これらのことはすべて、預言の成就を示すと共に、イエスさまが徹底的な侮辱、軽蔑、あざけりを受けられたことを意味しています。今日のルカの聖書箇所は、イエスさまが十字架刑の耐え難い肉体的な苦痛と共に受けられた、人々からの徹底的な侮辱の数々がひたすら挙げられているのです。

そして、その侮辱の中でも、繰り返し語られているのは、「自分を救ってみろ」という言葉です。合計、三回出てきます。

まず、35 節では十字架を見つめていたユダヤ人の民衆や最高法院の議員たちが、あざ笑って言いました「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」

次に、36 節でローマの兵士たちが侮辱して言いました。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」

そして、これは次回に読む箇所ですが、39 節に、一緒に十字架にかけられていた犯罪人の一人がののしって言うのです。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

同胞のユダヤ人からも、異邦人からも、そして最も蔑まれ、今や自分の罪によって死刑にされようとしている犯罪人からも、つまり、ありとあらゆる立場の、すべての人間から、イエスさまは笑われ、侮辱され、ののしられたというのです。

これらのことも、今日の詩編 22:8~9 に語られていたことの実現でした。こうあります。

「わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い／唇を突き出し、頭を振る。『主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら／助けてくださるだろう。』」

イエスさまは、神の御子であり、神に選ばれ、遣わされたメシア。救い主です。また、この世のどこかの地域の王ではなく、神さまのご支配を実現する、まことの王であるお方です。

イエスさまはそのことを告げ、ご自分のことを証しし、神の力を示し、人々に教えて来られました。旧約聖書の預言も、洗礼者ヨハネも、イエスさまこそメシア、救い主であることを指し示していました。イエスさまが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた時にも、聖霊が降り、天から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」との声が聞こえたのでした。

しかし人々からすれば、主が愛しておられる者が、メシアが、救い主が、王が、死刑になり、痛みや苦しみを受け、あらゆる人々に侮辱され、しかも神に呪われた、十字架の木にかけられるなど、あり得ないことです。

「主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら／助けてくださるだろう。」しかし、お前は呪われているではないか。主なる神の愛など、守りなど、助けなど、どこにも見当たらないではないか。神に見捨てられているではないか。

人々を救うために来た、神に選ばれ、遣わされたメシア。しかし、人を救わなければならないのに、自分が十字架に架けられている。自分が神さまに見捨てられている。自分を救うことさえ出来ないのに、どうやって他の人を救うことが出来るのか。これまで奇跡を起こして、人を助けてきたとしても、今この時に、自分さえ助けられずに死んでいくなら、もはや救い主としての役割は果たせないではないか。

…十字架の上は、最も神から遠く離れ、神に見捨てられ、愛も希望も恵みも何もないと思われる所です。そんな十字架につけられている者が、神からのメシア？救い主？神に選ばれた者？ユダヤ人の王？そんなことはあり得ない。

確かに、人々がこう考えるのは、至極当然のことだったかも知れません。

<イエスさまの祈り>

そして、人々から「自分を救ってみろ」と言われたイエスさまが、驚くような奇跡を使って、十字架から降りて来られることはありませんでした。そのように、人々の要望に応えるような仕方で自分を救い、ご自分がメシアであると示したりはなさいませんでした。

イエスさまは、ひたすら全てを耐え忍ばれました。イエスさまは、メシアだからこそ、まことの王だからこそ、苦しみを受け、十字架で死ななければならなかったのです。

イエスさまは、メシア、救い主なのに、まことの王なのに、十字架にかけられて殺されてしまう。だから神に選ばれた者ではない、メシアではない、王ではない、というではありません。

イエスさまは、神に選ばれた者だからこそ、メシア、救い主だからこそ、まことの王だからこそ、すべての人の罪をご自分が担って、十字架にかかって死なれるのです。

34 節で、イエスさまはこう祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

そうです。人々は知らないのです。イエスさまが受ける苦しみは、自分たちを罪から救うための苦しみであることを。イエスさまが呪われたのは、自分たちの呪いを取り除くためであることを。イエスさまが受ける死は、自分たちを生かすための死であることを。

「メシア」というのは、ヘブライ語で「油注がれた者」という意味であり、ギリシア語にすると「キリスト」です。

旧約聖書の時代から、神さまが特別な務めのために選び、立てられる人物には、そのしるしとして油が注がれました。その務めとは、預言者や、祭司や、王などです。

やがて、神さまに選ばれ、人々を救う者が現れる、という預言から、人々はその特別な任務を負う者のことを「メシア」と呼び、救世主、救い主として待ち望んできたのです。

そのうちに人々は、理想のメシア像を描き、力ある預言者、自分たちの滅んでしまったイスラエル王国を立て直す王、栄光に満ちた、立派で強いメシアを期待してきたのでしょう。

しかし、神に選ばれた者、メシア、救い主とは、奇跡をばんばん行って、人々をひきつけ、驚かせ、敵を一掃して、華やかに活躍する者なのではありません。そもそも救いとは、自分の敵がいなくなることや、自分たちが栄えることではありません。

救いとは、まことの神さまと共に生きること。これこそ、わたしたちの救いなのです。

ですから、イエスさまはそのために。地上のすべての者が、神さまに背いた罪を赦され、神さまの御言葉を聞き、神さまに立ち帰って、神さまと共に生きる者となるために。神に選ばれ、遣わされたメシア、救い主なのです。

神さまは、わたしたちと共に生きることを望んで下さっているのに。ずっと愛と恵みを注いで下さっているのに。わたしたちは神さまの御心を知らず、神さまに背き、神さまに対して罪を犯してきたのです。そのために、わたしたちは神さまの怒りに触れ、裁かれ、自分の罪によって滅びるべき者でした。

救い主であるイエスさまが、わたしたちの罪を代わりに担って下さるのでなければ、わたしたちは神さまに対して犯した自分の罪を、自分で担わなければなりませんでした。

イエスさまが、わたしたちの代わりに裁きを受けて下さるのでなければ、わたしたちは神の裁きの前で、確実に有罪の判決を受けるべき者でした。

イエスさまが、わたしの代わりに呪いの十字架の死を死んで下さるのでなければ、神さまの怒りに触れ、裁かれ、呪われ、見捨てられ、永遠の滅びへと向かうのはわたしたちだったのです。しかし、わたしたちはそれを知らなかった。

イエスさまの十字架のお姿は、わたしたちの罪をすべて引き受けて下さったお姿です。

そのようにして、イエスさまはわたしたちの罪を代わりに贖い、わたしたちの代わりに死に、わたしたちに罪の赦しと、神と共に生きる新しい命を与えて下さるのです。

そして、父なる神さまの御心、つまり神さまは、わたしたちが神さまに立ち帰って、神さまを礼拝し、神さまを喜んで生きる者となることを望んでおられる、ということを示し、わたしたちを悔い改めへと、父なる神さまの下へと、導いて下さるのです。

<十字架のイエスさまこそ、まことのメシア、まことの王>

この方こそメシア、まことの救い主、まことの王です。イエスさまは、わたしたちを救うために、わたしたちのために、命をお捨てになったのです。苦しみを受け、血を流しておられる十字架のイエスさまこそ、わたしたちのまことの救い主、わたしたちのまことの王、愛と、赦しと、恵みによって、わたしたちを支配する方なのです。

あのピラトが皮肉を込めて掲げた札には「ユダヤ人の王」とありました。しかし、それは十字架に架けられたイエスさまにおいて、まことのこと、真実であったのです。

そしてイエスさまは、ユダヤ人の王のみならず、わたしたちすべての人間を罪の支配から解放し、神さまの恵みのご支配へと招いて下さる、まことの王なのです。

この十字架に架けられたまことの王は、神に見捨てられたような、あらゆる苦しみも、悩みも、痛みも、嘲りも、絶望も、死も、すべてご自分の身に引き受けて下さいました。

それは、もしわたしたちがこの世にあって、どのような苦しみに陥ろうとも。絶望を感じようとも。神に見捨てられたと叫びつつ倒れようとも。そのようなところにも、十字架のイエスさまが、わたしたちと共にいて下さる。そこにもなお共におられ、わたしのすべての重荷を担って下さっている、ということです。

わたしたちの、悩み苦しきも、嘆きもすべてをご存知でいて下さり、誰より深く苦難を味わわれたこの方だからこそ、イエスさまは、わたしたちに慰めと励ましを与えることがお出来になります。そして、神さまの愛を示して下さい、復活に至る希望を与え、わたしのすべてを担って、共に歩んで下さるのです。

世の王は、権力や力によって、高いところから人々を支配しますが、まことの王は、愛によってわたしたちを支配して下さいます。そのゆえにイエスさまは、わたしたちよりも低く降り、わたしたちに仕え、わたしたちの重荷をすべて担い、わたしたちのために十字架にかかって、命を投げ出して下さるような王なのです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」
十字架上で、わたしたちの罪を担い、わたしたちの罪の赦しを、父なる神さまに祈って下さるイエスさま。

この十字架のイエスさまにおいてこそ、わたしたちの救いは実現したのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、自分が何をしているのか知りません。あなたに大きな罪を犯し、あなたの愛を裏切り、恵みを忘れ、御子イエスさまを十字架につけろと叫んでいた者です。

しかし、御子イエスさまは、わたしたちが受けるべき罪の裁きも、あなたの怒りも、滅びるべき死も、すべてのその十字架の上で担って下さいました。十字架にかけられたイエスさまのお姿は、わたしたちに罪の赦しを与えるという宣言であり、またわたしたちに悔い改めて、神さまの御許に立ち帰ることを求めておられます。

イエスさまが、「父よ、彼らをお赦してください」と祈って下さいました。イエスさまの十字架によって、神さま、どうかわたしたちの罪をお赦し下さい。

そして、愛と救いを惜しみなく与えて下さる神さまを、わたしたちも愛する者とならせて下さい。わたしたちを、あなたの愛と恵みのご支配の下に生きる者として下さい。

今日は聖餐の恵みにあずかります。イエスさまの十字架の死を覚え、イエスさまが流された血、裂かれた肉によってこそ、わたしたちに罪の赦しと命が与えられたことを、深く味わわせて下さい。そして、一人でも多くのもものが、イエスさまの十字架と復活による救いを信じ、共にこの聖餐に与ることが出来ますように。

このお祈りを救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 301 「深い傷と流れる血に」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】

【讚美歌】 72 「まごころもて」

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン